（第３種郵便物認可）　大阪日日新聞　2010年1月15日（平成22年）（金）　大　阪

澪標（みおつくし）

緒方洪庵生誕200年に寄せて

原田　彰子　熟塾代表

今からから200年前、備中国（現・岡山市北区足守）足守藩士・佐伯瀬左衛門惟因の家に、3人目の男の子が生まれました。長じるにつけ生まれつき虚弱で病気がちなことに悩み疑問を感じます。「人は何故（なぜ）、病になるのか…」。自らの体に少年は問い続けました。やがて、大坂へ出て医学の道を志し蘭学を学び、蘭学塾「適々斎塾（適塾）」を開きます。

ドイツの医師フーフェランドの医師の心構えを説いた扶氏医戒之略「金銭や名誉の為（ため）ではなくただ人を救え」を医師の心得として出版し、広く志を伝えました。全国から緒方洪庵を慕い多くの若者が集い、福澤諭吉、大鳥圭介、橋本左内、大村益次郎、長与専斎、佐野常民、高松凌雲など幕末から明治維新にかけて活躍した多くの人材を輩出しました。

やがて緒方洪庵は幕府から請われて江戸城に入り、奥医師兼西洋医学所頭取となり、医師として最高の地位についたというのに、自由に市中の人々と交わり、塾生たちと過ごした適塾での日々を懐かしんだというのです。その適塾は、今も大阪の船場の地に現存しています。

適塾を目指そうと藤本義一先生に「熟塾」と命名いただいた市民文化活動グループを旗揚げして16年。働きながらの活動ですが、学びの場を手作りしてきました。

今年は、適塾を開いた緒方洪庵生誕200年を迎えます。私たちは、適塾を目指すことにより、緒方洪庵という〝世の為、人の為に生きた〟一人の志が、幕末から明治維新にかけて活躍する若者の心に宿り、やがて大きな時代の変革期を乗り越えていく一助になったことを学びました。

今は明治維新にも似た時代の変革期であり、今までの価値観や、前例に倣うことができない時代ともいえます。しかし、今政治・経済はただ迷走するばかりで、そこに来るべき新しい時代の姿が浮かんできません。明確な指針のないまま、政治・経済が迷走し、人々の暮らしへの不安は拡大するばかりです。

緒方洪庵が実践した志「人の為、世の為」。政治家も経済人も、利己心に凝り固まり、かつて日本社会がもっていた「お互い様（さま）」という思いやりが希薄になってきました。緒方洪庵は、実践しました。医者として我（われ）を捨て人を救うことを…。

そしてそのまなざしは当時流行した天然痘感染から人々を救うことへと広がり、除痘館を開くことに奔走します。冷静で温和な人柄の緒方洪庵のただひたすら「人を助けるために」奔走する姿は塾生はもちろん周りの人々を動かしたのでしょう。

時代を超えて、師と呼べる人と出会える幸せ。それも同じ大阪の地で今は昔、聖徳太子の時代から無数に偉大な先人は存在するのです。それに気付くこと。歴史の教科書だけではなく、大阪の地に生きた先人の熱い思いに触れる時、大きな感動があります。今年は緒方洪庵生誕200年です。一人一人が「志」という指針を持って、この変革期を超えていきたいものです。

（大阪府八尾市）

はらだ　あきこ

商社勤務。入社後、大学で学んだ中国語を生かし、25年前ボランティアで帰国した残留孤児のための日本語教室の日本語教師を１年間担当。会社でもボランティアサークルを作り、手話を学ぶ。1996年６月、49歳で他界した弁護士高橋正毅氏との出会いをきっかけに94年10月、平成の適塾を目指し、「熟塾」を旗揚げ。西大寺の「善財童子」と同様に、小さいながらもさまざまな人々の教えを請いながら悟りを開こうと試行錯誤、ただ今熟塾の活動を通して修業中。

この欄に対する感想（400字以内）をお寄せください。採用、掲載分には図書カードをプレゼントします。『澪標』編集部

（第３種郵便物認可）　大阪日日新聞　2010年2月26日（金）　大　阪

澪標（みおつくし）

緒方洪庵生誕200年に寄せて

その2　〝適々〟と生きること

原田　彰子　熟塾代表

今年は適塾を開いた緒方洪庵生誕２００年を迎える。適塾はビルが立ち並ぶ北浜に平然とその面影を今に伝えている。１９９４年に有志で勉強会を立ち上げようと集った時に、メンバーの一人が、「大阪には適塾がある」と提案し、藤本義一先生に〝熟塾〟と命名いただくこととなった。旗揚げしたばかりの11月、大阪大学の梅渓名誉教授とともに緒方洪庵について学ぼうと初めて適塾の門をくぐった。

緒方洪庵の号は適々斎で「適々」とは「心に適う道を楽しむ」という意味だが、適々斎塾（適塾）で塾頭を務めた福沢諭吉は「世の中は自分の思う通りにはならないけれども、適々と生きていければいつか自ら意の如くになる」と詩に詠んでいる。

緒方洪庵は、昼間は医師として診療にあたり、夜はオランダ語の翻訳・研究をし、さらにその合間に塾生の指導に当たった。

適塾には天保15（１８４４）年から、幕府奥医師兼西洋医学所頭取となった洪庵が54歳で江戸で亡くなる翌年の元治元（64）年の間に、姓名録には６３６人の名が記され、北海道から鹿児島まで遠くから緒方洪庵を慕う若者が適塾を目指し、その門をくぐった。姓名録に署名していない通学生も多く門下生の数は千人を下らないといわれている。

入塾には学力試験はなく、身元引受人がいて入学金が払えれば誰でもが適塾生になれた。入塾するとオランダ語の文法などの基礎を上級生が下級生に教え、原書を読む「会読会」の実力によってクラス分けされた。

原書の中から会読会のテキストが選ばれると、適塾２階の小部屋に置かれた１セットしかない「ゾーフ・ハルマ」という蘭和辞書の写本を塾生同士が奪い合うようにして辞書を引き、月に６回開かれる会読会に臨んだ。他の人に聞く事は禁じられ、実力でクラス分けされたので、塾生同士が絶えず切磋琢磨して学んだ。

そこには当時厳しかった士農工商の身分の差はなく、武士や医師・農家・商家と出身もさまざまで、生まれ故郷も年齢も異なる若者が集い、通いの塾生もいたが、塾の２階に住み込んで寝食を共にしながらオランダ語を学ぶことに専念し、自分の力で海外の新しい知識に出会い、世界を垣間見た。

適塾の塾生たちは緒方洪庵に憧れ、授業を受けるときには、きっと耳をそばだて、目を見開いて全身でその講義を聴いたことだろう。

バーチャルな世界には限界があるが、適塾は奇跡的に明治維新の荒波を乗り越え、戦災に遭遇することもなく、ここに生きた洪庵やその家族、若き日の福澤諭吉、大村益次郎、大鳥圭介、橋本佐内、佐野常民などの多くの塾生の思いを抱きながら凛として立ち続けている。

今、世界経済は混乱し日本の先行きにも陰りが見え始め、時代の転換期を迎えて、大きく風向きが変わろうしている。だからこそ、人の意見や社会の流れに惑わされず、そして挫けず「適々」と自分の心と向き合いながらひたむきに生きることが大切になっていくだろう。

緒方洪庵生誕２００年を機に、適塾の門をくぐってほしい。小鳥のさえずりを聞きながら、中庭から青い空を眺めていると、緒方洪庵先生の柔らかな眼差しを感じ、私はいつも励まされている。

（はらだ・あきこ　大阪府八尾市）

この欄に対する感想（４００字以内）をお寄せください。採用、掲載分には図書カードをプレゼントします。『澪標』編集部

APR.-9.2010
（第３種郵便物認可）
大阪日日新聞
大　阪

澪標（みおつくし）

原田　彰子
熟塾代表

緒方洪庵生誕200年に寄せて

その3　洪庵を輝かせた妻・八重

運命の糸車に手繰り寄せられるように人は人と出会い、人生模様を織りなしていく。江戸時代末期、蘭学医を目指した一人の苦学生に目を向ける。同門の医師がいた。男は以前名塩和紙を商っていた。

200年前の文化2（1805）年7月14日、備中国足守藩（現岡山市北区足守）の下級藩士佐伯惟因の三男として生まれた緒方洪庵は、家督を継ぐ兄とは異なり、自立の道を探さなくてはならなかった。元服した洪庵16歳の時、薩摩堀中筋町（現大阪市西区立売堀4丁目）に新しく設けられた足守藩蔵屋敷の留守居役を命じられた父に随行し大坂に入る。

翌年、「〝医の道〟は、疾病を治し、万民を救う方法なのです」と父親宛に医師になる志を立てた「置き手紙」を残し、大坂の坂本町（現同市西区京町堀2丁目）にあった蘭学医の中天遊の私塾・思々斎塾の門下生となる。そこで、同門の摂津国名塩（現兵庫県西宮名塩）の医師で当時薬の製造販売業を手広く営んでいた億川百記と出会った。

百記は穏やかで聡明な緒方洪庵の人柄に魅せられ長崎留学を支援し、29歳の洪庵の元に、娘八重を17歳で嫁がせる。八重は深く洪庵を敬愛し、献身的に夫を支えた。13人の子供を産み育てたばかりか、全国から洪庵を慕って入門する千人以上といわれる塾生をもわが子のように見守った。特に住み込みで学ぶ若い塾生たちの賄いを一手に担い、お手伝いさんらの陣頭指揮をとって寮母としても奮闘。

幕府奥医師兼西洋学問所頭取となった洪庵が、54歳で江戸で急死した後も、八重は幼没した4人を除き9人の子供たちを育てあげ、ロシア、オランダ、フランスへと3人の息子たちを幕府留学生として海外へ送り出している。

そして、洪庵の死後5年の後、明治元（1868）年に大阪に戻り元種痘所を隠居所として暮らし、明治19年、65歳でその生涯を閉じた。福澤諭吉ら塾生に「おっかさんのような人」と慕われた八重の葬列は2千人を数えていたという。

緒方八重は、まさしく名塩和紙のような人だった。雁皮に、泥を漉き込む独特の技法で漉かれた名塩和紙は、色焼けしにくく、燃えにくく、虫食いの害を防ぐことができるため、江戸時代には藩札用紙として全国的に普及。当時八重の故郷は名塩千軒と称され「紙漉きの里」として繁栄していたが、今は人間国宝（名塩雁皮紙製作技術保持者）の谷野武信氏とご子息だけが名塩和紙を漉き上げるばかりとなり、桂離宮や二条城、西本願寺、沼津の御用邸や、数々の文化財の作品の修復に使われている。

名塩和紙は薄くてしなやかで、驚くほど強い。和紙独特のシミが浮き出ず100年たっても日焼けするどころか、書かれた文字を黒々と浮き上がらせ、下張りに使われた金屏風は金箔を年月とともに次第に輝かせる。名塩和紙のような八重との出会いが、緒方洪庵を医師・蘭学者として輝かせ続け、名塩の蘭学通りに面した生家跡に立つ八重の胸像は、今も慈愛に溢れた眼差しで行き交う人々を優しく見つめている。

（はらだ・あきこ　大阪府八尾市）

この欄に対する感想（400字以内）をお寄せください。採用、掲載分には図書カードをプレゼントします。『澪標』編集部

（第３種郵便物認可）　大阪日日新聞　平成5年1月1日（金）　大

澪標（みおつくし）

緒方洪庵生誕200年に寄せて

その4　維新を生き抜いた洪庵の志

原田　彰子　熟塾代表

江戸時代、大坂は〝天下の台所〟と称された。天保年間（1830～43年）には125の藩のほかに小藩や大名以外も含めると600近くはあったといわれる蔵屋敷が、大量の年貢米や特産品を換金するために大坂に運び込み、売り買いし、全国の消費地に輸送される一大物流・金融拠点として大いに賑わい、米の取引所・堂島米会所では世界初の先物取引市場が開設されていた。蔵屋敷内には米や特産品を納める蔵や、事務所、詰役の宿舎に、藩によっては国元の土佐稲荷や水天宮などを分社し祀っていた。

蔵屋敷の運営は、各藩から派遣された武士である蔵役人と、立入人と呼ばれる商人たちにより構成。蔵役人は蔵屋敷の管理を担当し、留守居は商人との交渉の総責任者であった。

緒方洪庵の父、備中国足守藩下級藩士・佐伯瀬左衛門惟因も蔵屋敷の留守居役の任を命じられ、元服した16歳の息子洪庵を連れて大坂に足を踏み入れている。

後に適塾の塾頭となる一万円札の肖像画として有名な福澤諭吉は堂島浜（現大阪市福島区福島1丁目）にあった豊前国中津藩蔵屋敷の勘定方勤番で、下級藩士・福澤百助の次男として大坂で産声を上げたが1歳6カ月の時父の死去により帰郷。母が大坂風の暮らしを好み兄弟共に大坂弁をしゃべるのだから、中津での幼い日々は随分と窮屈で退屈なものだったらしい。

諭吉は、19歳で長崎に遊学し翌年西洋砲術を学ぶためと江戸行きを企て、道中亡父と同様に大坂の中津藩蔵屋敷に勤めていた兄に挨拶に行く。兄から蘭学を学ぶなら大坂に緒方洪庵先生の適塾があるからと説得され江戸行きを断念、蔵屋敷に居候しながら学ぶことになる。

緒方洪庵も福澤諭吉も、天下の台所を支えた蔵屋敷が「縁」で大坂を舞台に活躍することになる。そして、医師・蘭学者としての緒方洪庵の名声も驚異の蔵屋敷情報ネットワークによって全国に広まり、多くの塾生が適塾を目指して大坂にやってきた。

幕末、廃藩置県によって蔵屋敷は新政府によって接収されたため、蔵屋敷に出入りしていた大坂の豪商の多くが各藩からの債権を回収することができなくなり破産。「天下の台所」と称された大坂の賑わいは終わりを告げ、堂島・中之島を中心に白壁の蔵屋敷が立ち並び、入船出船の往来が絶えることがなかった水辺の風景は、大坂の人々の記憶から消えていった。

大阪市立美術館の南門として天王寺公園内に移築されている福岡黒田藩の「蔵屋敷長屋門」のみが天下の台所の面影を今に伝える数少ない遺構として往時を語るばかりである。

緒方洪庵は、幕府の奥医師兼西洋医学所頭取として江戸にて54歳で急死。適塾に集った塾生も、帰郷して藩医として仕えていた者は幕末にその地位を失い軍医に転身するなど新しい職を求め、大半は家業を継いで各地の町や村の医者として師の「世の為、人の為、道の為」の薫陶を胸に地域医療に専念。塾生たちとともに洪庵の志は、明治維新を生き抜くことになる。

（はらだ・あきこ　大阪府八尾市）

この欄に対する感想（400字以内）をお寄せください。採用、掲載分には図書カードをプレゼントします。

『澪標』編集部

（第３種郵便物認可）　大阪日日新聞　2010年7月7日（水）

澪標（みおつくし）

原田 彰子　熟塾代表

緒方洪庵生誕200年に寄せて

最終回　7月14日200年目の誕生日を祝う会へ

「大阪には適塾がある！」と16年前に自主学習会を旗揚げしようと集い、まず会の名前を決めようと思った時に口火を切ったメンバーがいた。門前のＯＬで何度も適塾の前を通りながら、この建物は…と思いつつも素通りしていた。

適塾を目指して、藤本義一先生に命名いただいた「熟塾」。まずは「適塾」について学ぼうと、大阪大学の梅渓昇名誉教授にお願いし、緒方洪庵先生の生涯についてお話を拝聴した後に、南森町にある龍海寺の墓所にお参りに行ってからはや16年。今年、緒方洪庵先生の生誕２００年目を迎えることになった。

1月、東京都文京区の高林寺にお墓参りに行った。洪庵先生の遺徳を偲ぶにふさわしい大きな天然石のお墓だった。奥医師兼西洋医学所頭取として江戸に来て早々、将軍家茂や和宮・天璋院が麻疹にかかりその治療に追われ、翌年3月やっと八重夫人と子供を大坂から呼び寄せて生活をはじめた直後の6月10日、突然吐血し急死。54歳の生涯を閉じた。

通夜の後、12日に大村益次郎や福澤諭吉ら愛弟子らに見送られ江戸の地に葬られた。墓前で手を合わせていると、いつもは気丈な八重夫人の肩が小刻みに揺れ、うなだれる袴姿の男たちの後ろ姿が彷彿と浮かんだ…。6月には洪庵先生の故郷・岡山市北区足守を再訪。夜には生誕の地近くの足守川に乱舞する蛍の光に命の儚さと確かさも見た。

もし「熟塾」を旗揚げしていなければ、私はあのまま「適塾」の前を素通りし続けていたことだろう。梅渓名誉教授の著書や講義を通し洪庵先生と何度も出会った。

「門前の小僧習わぬ教を読む」まさに門前のＯＬが緒方洪庵先生の遺徳を顕彰するために、生誕２００年の今年「熟塾」で関連の講座を毎月開催するとともに、13年前から編集委員を務めている季刊誌「大阪春秋」の１３９号夏号の特集に「緒方洪庵生誕２００年」を提案。

昨年、ＴＢＳ日曜劇場「ＪＩＮ－仁－」で放映された武田鉄矢氏演じる緒方洪庵先生がテレビドラマに登場。ドラマでは南方仁という現在の脳外科医が江戸時代にタイムスリップする文久2年、洪庵先生も江戸にいた。原作の漫画の著者「村上もとか」氏に取材依頼を申し込んだところ快諾いただき、東京のスタジオを訪ねた。

洪庵先生が南方仁とともに医師としてコレラから人々を助ける姿が多くの共感をよんだその漫画に込めた思いとは…。「緒方洪庵と南方仁」のインタビュー記事として原稿にまとめ、さらに生誕２００年を祝っての文章を寄稿した新風書房発行の「大阪春秋・第１３９号」（１０５０円）は7月1日発売で、紀伊国屋・旭屋・ジュンク堂などの書店に並ぶ。

7月14日（水）の生誕の日の夜7時から「緒方洪庵先生の２００年目の誕生日を祝う会」を除痘館跡の緒方ビル（中央区今橋３の２の17）で、梅渓名誉教授もお迎えし開催。生誕２００年目に、緒方洪庵先生の生涯から今を生きる力と希望を与えていただけることに感謝したい。

熟塾ホームページは次の通り。

http://www.jukujuku.gr.jp/

（はらだ・あきこ　大阪府八尾市）

この欄に対する感想（４００字以内）をお寄せください。採用、掲載分には図書カードをプレゼントします。『澪標』編集部